連載⑪

内海善雄（ITU前事務総局長）のやぶ睨み「ネット社会」論

「1984年」――小説の社会になる前に

ネット社会でnot connected（通信途絶）は、すべて事故や災害の時に起きる。世界中の人々を感動させたチリ鉱山の事故で閉じ込められた三十三人の人たちの救出劇も、実はnot connectedとの戦いであった。

閉じ込められた三十三人は、電話が通じないため、外界に生存を知らせるために、さまざまなことを試みたらしい。まず、ダイナマイトで爆破して外界への突破口を造るべきだと主張した者、また、重機を壁にぶつけてその振動で知らせる、あるいは、タイヤを燃やして煙で外に知らせるという者もいたらしい。

ダイナマイトによる爆破やタイヤを燃やすことが本当に行われたかどうかは不明であるが、いずれにしても、これらの試みはすべて失敗した。一方、救出隊のほうでは、避難所に逃げていることを予想して、避難所をめがけてドリルで穴を開けた。しかし、避難所の位置が正確でなかったため届かず、生存の確認はできなかった。諦めかけた八回目の掘削で初めて避難所の近くへ到達し、引き上げたドリルの先に、あの感動的な、三十三人が無事だというメモがあったのである。

地下では、地上から真っ先に降ろされた小型ビデオカメラを見て、自分たちの生存が伝わったと三十三人は歓喜した。まもなく光ファイバーが敷設され、テレビ電話やフットボールの中継もできるようになった。

ところが、外界と隔絶して、死と直面していた時は結束していた三十三人だったが、救出されると分かった途端、争いが起きるようになった。それは、家族とできるだけ長く対面しようとして一本のテレビ電話回線をめぐっての争いであったという。

通信途絶との戦い

二〇〇九年七月、北海道トムラウシ山で高齢者ツアー登山の大きな遭難事故があった。事故当初、現場からは携帯電話が通じるにもかかわらず救助要請がなされなかったとの批判的な報道があった。しかし、その後の事故調査報告書では、遭難者たちは携帯電話を使って警察その他に連絡しようと、電波が届きそうなところを探して山を登ったり降りたり、メールを試みたり、さまざまな行動をしていたことが分かった。まさに通信途絶との戦いであったようだ。連絡さえ成功していれば、こんな大惨事にはならなかったのである。去る十月の奄美大島の大雨災害をはじめ、鉄道、航空、金融、電力などが通信の途絶により大混乱した例は、枚挙にいとまがない。現代社会は、一瞬たりとも通信の途絶が許されないものになっている。

通信は、途絶えて初めてその重要さに気がつく。しかし、途絶されなければ接続されていることすらも忘れている。かつては高額料金を気にして電話を早く切ることに努力したが、今は料金も下がり、インターネット電話の普及もあって、国際電話といえども時間を気にする人はほとんどいない。携帯電話は、電源を切らない限り常に基地局と通信をしている。PCも定額制でつなぎっぱなしだ。

通信依存症候群

現代人は、たった一日でも通信ネットワークから隔離されると何もできなくなる「通信依存症候群」にかかっているようだ。携帯電話を家に忘れたりすると、大変困る。予定した行動ができないばかりか、何か連絡があるのではないかと未知の通信が心配になって、帰宅すると一番に電話に飛びつく。職場では、ネットに接続されたPCが手元にないと、まったく仕事ができない。最近は、自分の行動を四六時中ツイッターで発信しなければ気がすまない者もいるから驚きだ。

スペースシャトルの飛行では、クルーもコントロールセンターも一番緊張するのは、地球帰還時に大気との摩擦でプラズマが発生し通信が全く途絶える魔の数分間であるという。

街でも駅でもオフィスでも、監視カメラに見張られている

ネットで丸裸にされる社会

ジョージ・オーウェルは、小説『1984年』で未来の管理社会を予想した。その一九八四年に上映された映画「ウォー・ゲーム」では、PCの使用を当局から監視され、その使用状況からテロリストに間違われた主人公は、モントリオールの街を警察の追及から逃げ回る。しかし、警察は街頭の監視カメラで行動をフォローしているので、どうしても追跡から逃れられなかった。二十七年前の当時、この映画の情景は、まだサイエンティフィック・フィクションであった。

今、各人の大事な情報は、ネットに接続された官庁や銀行のコンピューターに蓄積され、また、ネットへのアクセス状況は、グーグルなどの検索エンジンにつぶさに記録されて、趣味や行動の詳細までが丸裸になっている。

街では、至る所に設置された監視カメラが二十四時間、我々を監視している。最近の監視カメラは、不特定多数の者から特定の人を自動的に検出する能力も備えているという。警察が設置したものも多いが、民間企業も個人も自由にカメラを設置して他人を監視することができる。年間数千万台出荷（国内）の防犯カメラ市場は急拡大しているのだ。まさに映画の予想した通りになってきた。

人類は、烽火（のろし）通信からモールス電信機の発明、そしてインターネット、ブロードバンドへと叡智を絞って通信手段の高度化を追求してきた。その結果、世界中の誰とでも二十四時間、いつでも通信でき、欲しい情報は何にでも即座にアクセスできるようになった。得られたことは極めて大きかったが、一方、ネットから離れる自由を失い、逆にコントロールされる危険を背負った。そろそろ、どうすれば忍び寄る危険を小さくすることができるか、真剣に考えなければならない時にきているのではないかと思う。今にネットが、映画「2001年宇宙の旅」の「ハル」のような力を持たないとも限らない。

内海善雄（うつみ よしお）

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省（現総務省）入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合（ITU）事務総局長就任。現在は財団法人「海外通信・放送コンサルティング協力」理事長。早稲田大学客員教授。